

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当	
C-100	C-139	13-108	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)			
Alcohol as a modifiable lifestyle factor affecting multiple sclerosis risk. 多発性硬化症に対する行動変容可能な生活習慣因子としての飲酒			
執筆者			
Hedström AK, Hillert J, Olsson T, Alfredsson L.			
掲載誌			
JAMA Neurol. 2014 Mar;71(3):300-5. doi: 10.1001/jamaneurol.2013.5858.			
キーワード		PMID	
多発性硬化症、飲酒、アルコール、オッズ比		24395432	
要 旨			
<p>目的： 飲酒は多発性硬化症に対する行動変容可能な生活習慣因子であると考えられており、アルコールと多発性硬化症間のリスク検証および喫煙に対するアルコールの及ぼす影響との関連を検証する。</p> <p>方法： 2005年4月から2011年6月にかけて745症例と対照例1,761を集めたEIMS(多発性硬化症に関する疫学調査)研究と2009年11月から2011年11月にかけて5,874症例と対照例5,246を集めたGEMS(多発性硬化症の遺伝子と環境要因に関する調査)研究の2つのケース・コントロール研究のデータを用いた。EIMS研究とGEMS研究はともにスウェーデンの16歳から70歳の被験者を集めたポピュレーション・ベースド研究で、マクドナルド・クライテリアを満たしたものだ。EIMS研究ではスウェーデンの全ての大学病院を含む40施設を介して多発性硬化症の症例を集めた。GEMS研究ではスウェーデンの多発性硬化症国民登録により罹患を抽出した。両研究ともに対象群は性別、年齢、居住地域が合致する者を国民人口登録より無作為抽出した。</p> <p>結果： 性別にかかわらず、アルコール量と多発性硬化症の間には統計的に有意な負の関連が確認された。EIMS研究では多飲酒を報告した女性が非飲酒女性と比較して多発性硬化症の進行に対するオッズ比が0.6(95%信頼区間, 0.4-1.0)であり、多飲酒を報告した男性が非飲酒男性と比較して多発性硬化症の進行に対するオッズ比が0.5(95%信頼区間, 0.2-1.0)であった。同様にGEMS研究におけるオッズ比は女性で0.7(95%信頼区間, 0.6-0.9)、男性で0.7(95%信頼区間, 0.2-0.9)であった。両研究とも喫煙による悪影響は非飲酒者でより顕著に出た。</p> <p>結論： アルコール量と多発性硬化症の間には負の関連が確認された。アルコール消費は喫煙による希薄化効果が認められた。本研究の結果は、実臨床において多発性硬化症患者に対してアルコール摂取を一切控えるように指導・支援してこなかったことに関係すると考えられる。</p>			